

炉辺の枕(5)

『戦争映画を解説せよ！／永田喜嗣』

現代と向き合う映画評を期待する

美賀多台 つだわたる

映画関係の書籍は1000冊程度持っていますが、もっとも最近に買ったこの本を紹介します。なぜ我が家にこれほど多くの映画関係の本があるかと言えば、映画サークルの創立に関わった先輩が所蔵されていた約800冊を「処分するのはもったいない」ので私が預かったからです。

黒澤明の脚本全集からキネマ旬報特集号など様々ですが、大半は映画評論の単行本です。佐藤忠男、蓮見重彦など戦後に活躍された映画評論家から和田誠『お楽しみはこれらだ』など軽く読めるものもあります。

しかし大半はツンドク状態です。なかなか古い映画評論を読み直す気持ちにはなれません。ですから今回は2024年発行の映画評論を紹介します。

多くの戦争映画を分析

著者の永田さんは20年ほど前からの知り合いで、その頃から「抗日映画」という分野の研究者でした。しかし世界中の映画をたくさん見ていて、もっと広い範囲の映画について映画サークルの学習会で呼びました。

西神ニュータウン9条の会でも昨年「アジア諸国が描く戦争映画」という講演をお願いしました。この本の副題も「ナチス、大日本帝国、ヒロシマ・ナガサキ」となっていて、章立ても「戦争映画と映画戦争」「映画戦争の始まり」「第三帝国への抵抗」「大日本帝国への抵抗」「ヒロシマ、ナガサキ、ドレスデン」「日本人と戦争映画」「和解と共生という名の終戦」となっています。

具体的な映画はナチスドイツや大日本帝国に関わるものが多くなっています。

巻末の「二十世紀映画カタログ」で、戦前からのたくさんの戦争映画を紹介しています。本当に多くの映画を見てこられたと思いますし、戦争に関する研究もされています。この本の出版まで7年もかかったとそうですが、この間に「抗日映画論—恥辱と抵抗の構造」で博士号を取得されています。

永田さんの本格的な最初の本と言えます。

360頁の大部で「戦争映画が持つ社会的機能とその歴史を紐解き、戦争そのものに肉薄する新し試みをおこなうもの」で、実際にたくさんの映画を引用しながら細かく分析しています。

これまでも彼の講演を何度も聞いていますから、その解説にはいちいち納得します。しかし



期待が大きかったので、それだけでは不十分で、ちょっとがっかりしました。

それは21世紀に公開された邦画についてほとんど触れていないからです。わずかに『スパイの妻』ぐらいです。

現在の課題

現在の政治的な情勢は、歴史修正主義が大きくなっていると思います。安倍元首相もそうだし、参議院選挙で躍進した参政党などは戦前賛美と隠そうともしません。映画にはその傾向がないのか、あるいは真摯な映画に対する不当な攻撃はないのか、私はそれが気になりますから、この本でそういった現状に触れているかと思ったのです。

例えば、記録的な大ヒットとなった2013年の『永遠の0』について全く触れないのはなぜかと考えます。私は原作も含め、映画の公開時に全面的に批判しました。

この本の最後に「戦争映画を解説せよ！」と言われます。その通りです。マスメディアが、そこに立ち向かうのか不明ですが、永田さんにはその立場での奮闘を期待しています。